

# ヒロ大津波の記憶—Juliet Konoの詩から

篠 田 左多江

## はじめに

ハワイ島ヒロ（Hilo）は「公園の町」と呼ばれ、緑ゆたかな大自然の残る町である。空港からダウンタウンへ向かうと、海岸線に沿って広大な公園が広がっている。海の近くに多くのホテルや商店がひしめくホノルルの町とは対照的で、ひろびろとしてはいるが、淋しい印象を受ける。これは、ヒロがこれまで何度も大津波に襲われた結果なのである。

2011年3月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9の大地震に続いて、史上稀にみる巨大な津波が東日本を襲ったその日、太平洋を隔てたヒロでも同じ日の午後11時に、津波警報が出された。ワイアケア半島のホテルに滞在する観光客も高台に避難した。町では避難する住民の車が連なって交通渋滞が起こった。幸いにして、低位の津波が到達しただけであったが、日頃から「津波避難区域」の周知徹底と避難訓練の結果、人びとが迅速に行動できるようになったのである。

ヒロの町を襲った大小の津波は、第2次世界大戦以降だけでも6回に及ぶ。<sup>1</sup>この中でもっとも大きな被害が出たのが、1946年と60年であった。本稿では、2004年から現地で行った聞き取り調査をもとに、これらの津波と日系人について述べ、さらに日系詩人ジュリエット・コウノが詩のなかで描いた津波について論じる。

## 1. 大津波に消えた日系コミュニティ

1946年4月1日、2,300マイル彼方のアリューシャン列島で大地震が発生、午前7時にハワイ島へ津波が押し寄せた。この頃はまだ、津波に対する防備体制は皆無にひとしかった。当時、製糖プランテーションを出てヒロのダウンタウンへやってきた日系人の多くが海沿いのワイアケア (Waiakea) 地区に住んでいて、この地域の1部をシンマチ (新町)、海に張り出したワイアケア半島を椰子島と呼び、日系コミュニティを形成していた。彼らの大多数は漁業とその関連産業で生計を立てており、活気溢れる町であった。

スミエ・ウシジマ<sup>2</sup>は、日系二世で、両親は広島県尾道からの移民である。もともと漁師であった父が魚を獲り、母は“kago-hapai”<sup>3</sup>と呼ばれる魚の行商人となって、8人の子供を育てた。スミエは家が貧しかったため、上級の学校へ進学することをあきらめ、シンマチの理髪店に14歳のときから6年間奉公し、一人前の理容師となって独立した。20歳で日本から来ていた30歳の漁師と結婚、同じ町で夫は鮮魚店を、スミエは理髪店をそれぞれ経営していた。この町に理髪店は5軒あり、日系人のほか、フィリピン人の店もあったが、ハワイアン、ポルトガル系の白人などさまざまな人種を客として迎え、人種差別などなかったという。

夫婦のそれぞれの店は繁盛し、シンマチは日系人が差別もなく、平穏に暮らせる町であった。第2次大戦が勃発しても、州都ホノルルからは遠い田舎町だったこと、周囲のハワイアンは素直な良い人ばかりで、灯火管制があった以外は、戦争を感じさせる緊迫感はなかったという。夫は一世であったため、抑留所へ送られると覚悟を決めたが、そのようなこともなく、ウシジマの一家は何とか戦争の時期を切り抜けた。

津波がヒロ湾を襲ったのは戦後になって少し生活も落ち着きを取り戻した1946年4月1日であった。ヒロ湾は、日系人が「弦月湾」と呼ぶ三日月の形をした美しい海である。朝の7時に、いつもとはちがう異常な引き潮が起こった。当時は、地震速報などはなかったため、人びとはなぜそのよ

うな現象が起きたかを正確に把握することはできなかつたであろう。沖の方まで潮が引き、海底が見えて、水のない砂の上にたくさんの魚が跳ねていた。スミエの夫は漁師としての経験から、「津波が来る」と直感し、「津波が来るぞ、逃げろ」と叫んだ。スミエがまごついていると、車に乗った白人が、“Hey, come on!”と近づいて、高校生の息子を含む家族を乗せてくれた。これでいち早く高台へ避難したため、一家は命拾いすることができた。この事実を見ると、シンマチの人種関係はきわめて良好だったことがうかがえる。この日は運悪く、4月1日のエイプリル・フルであった。「津波が来るぞ」という叫びも、エイプリル・フルだと聞き流した人も多かったという。ヒロ管内では159名が死亡、日系人のなかにも多くの犠牲者が出た。

シンマチの他にも日系コミュニティは、島のハマクア・コーストに沿って広がっていた。ヒロを起点として南東は火山方向の内陸、北西は海岸沿いに製糖プランテーションが点在していた。当時の日系人の大多数は、製糖プランテーションに就労して、従業員住宅に住み、そこが日系コミュニティとなった。海岸沿いのプランテーションは、海辺（makai）に資材の搬入および生産物などを積み出す港があり、その周辺に製糖工場があった。一方、山側（mauka）にはサトウキビの耕地がずっと上まで続いていた。

津波の被害を受けたラウパホエホエ（Laupahoehoe）もそのようなコミュニティのひとつである。ここでは海辺に小学校があった。午前7時は、生徒たちの登校時刻であった。ヒロと同様、かつて見たこともないほどの引き潮に小学生たちは大いに興味をそそられ、海の底が露出して魚が跳ねている有様を見に、海の方へ駆け出して行った子供たちもいた。次の瞬間大津波が押し寄せ、4人の教師と、16人の小学生が犠牲となり、学校は土台を残して跡形もなく消え去った。

同じ時、ヒロからハマクア・コーストを北西へ向かったハカラウ湾（Hakalau Bay）にも津波は到達した。9メートルほどの波が押し寄せ、海辺にあった製糖工場を破壊したが、幸いにも人的被害はなかった。

さらに北西へ向かうとワイピオ湾（Waipio Bay）があり、津波によってククイハエレ（Kukuihaele）の防波堤は破壊されたが、海の近くに人家はなく、ここでも犠牲者はいなかった。このようにして、1946年の津波は、ヒロとその周辺の人びとに大きな衝撃を与えた。シンマチの1部の土地は準州政府の所有だったため、家を再建することは禁止された。借地をしていた人びとは戻ることができなくなり、仕方なく高台へ移っていった。ウシジマ家も借家だったため、シンマチを追われ、3年後に海からはるかに離れたマノノ・ストリートへ土地を買って、家を建てた。しかし自分の家を所有していた人びとは、家を再建したため、シンマチには次第に活気が戻った。1950年代には、40軒の商店があり、住民は約5,000人であった。

シンマチ日系コミュニティの繁栄もつかの間、1960年にヒロは再び大津波に見舞われた。5月23日午前1時5分、15時間前にチリで起こったマグニチュード8.3の大地震による津波がヒロに到達したのである。この時は、日本の三陸海岸にも大きな被害をもたらし、「チリ地震津波」と呼ばれている。津波は3回襲来し、回を重ねるごとに規模が大きくなっていった。

多くの人々は46年の津波を経験していたので、今度は警報のサイレンを聞くとすぐに避難した。しかし第1波は1メートル20センチほどであったので、人びとはほっと一安心した。第2波は、その倍ほどで2メートル74センチであった。それでもたいしたことはないと感じ、避難した人びとも自宅へ帰り始めた。最後に来たのは、10メートルもある大津波で、帰宅途中に流された人が多い。

そのなかで九死に一生を得たフサヨ・イトウは、みずから津波の語り部となって、その経験を多くの人びとに伝えた。1908年にヒロで生まれた二世のフサヨは、幼いときに父を亡くし、カウアイ島のマカウエリ（Makaweli）製糖プランテーションの伯父のもとで育てられた。成人してヒロに戻り、漁師の夫と幼い娘と幸せに暮らしていたが、第2次大戦中に夫は死去、32歳で未亡人となった。その後生計をたてるため、働きづめに

働いて女手ひとつで娘を育て上げた。

50歳をすぎてようやくほっとした1960年に、津波に遭遇したのである。フサヨは家とともに押し流された。ほかの家や自動車、瓦礫とともにヒロ湾の中を行ったり来たりしているうちに意識を失った。しばらくしてはっと我に帰ったとき、フサヨはまだ自分が家の中にいると錯覚した。しかし上を見ると星がまたたいていたので、驚いて足を地につけようとしたところ、水が深くて足は海底に届かなかった。そして外洋へと押し流されて行った。湾内にいた時は、流れてくるもので、水面が見えないほどだったが、どんどん流されていくと、瓦礫も少なくなり、海と空しかなかった。このあたりの海にはサメがいて、よく人間が被害にあうと聞いていたので、流木につかまって流されていくときに、生きた心地はしなかった。敬虔な仏教徒であるフサヨは、静かに「南無阿弥陀仏」を唱え続けて、ひたすら仏の慈悲を願った。

2日間海上を漂い、いよいよ「お浄土」に行くのだと覚悟をきめたとき、沿岸警備隊の船が近づいて、何人かがフサヨを助けようと海に飛び込むのが見えた。船に引き上げられると、安堵してまた意識を失った。収容された病院で気がつくと、奇跡的に怪我もなかったと医師から告げられたのである。

一方で、ひとり娘は母親が亡くなったと思いこみ、気が狂ったように遺体の安置所を駆け巡って、母を探していた。生きて救出されたという知らせに、病院に駆け付け、「ママ」と言ったきり、意識を失って倒れた。その後、落ち着きを取り戻した母娘は奇跡的な喜びの再会を果たしたのである。しかしそれから長い間、フサヨはPTSD<sup>4</sup>に苦しんだ。津波の夢を見て、夜中に逃げ出したこともあるという。<sup>5</sup>46年の津波の教訓が生かされたためと、以前よりの確な警報が出た結果、60年の死者は61人であった。しかし多くの家屋や船が流され、損害額は現在の通貨に換算すると1億7,100万ドルあまりで、シンマチは壊滅した。州政府は、住民の安全を第1として法律をつくり、住民を海岸から離れた津波の届かない地区へ強制的に移

転させた。シンマチは地図の上から消えてしまい、跡地はワイロア州立公園の1部となっている。

## 2. Juliet Konoの生い立ち

### ①幼年時代—祖父母の影響

ジュリエット・コウノ (Juliet Sanae Kono Lee) はハワイ島ヒロ生まれの三世の詩人・作家である。彼女は1943年、日本軍の真珠湾攻撃の翌年、全島に灯火管制が布かれたなかで誕生した。そして自らを“a black-out baby”と呼ぶ。

One night, a woman labors in the heat

of the black-out light.

Into this darkness, a child is born.

It is I. A black-out baby— (『ヒロの雨』 p.23)

彼女は暗闇の中に産み落とされ、日米戦争という暗い運命を背負った子供だった。家族にとっては祝福された子供であったが、合衆国本土に住む親戚は、強制収容所へ送られるなど、日系人は過酷な運命に翻弄された時期であった。当時のハワイ準州では、日系人口が総人口の40%を占めており、これらの人びとを強制的に立ち退かせると、ハワイ経済が多大な影響を受けることや、戦中のため本土の収容所への輸送船が不足していることなどから、強制収容は実施されなかった。したがってジュリエットは、州都ホノルルから遠く離れたヒロの町で、平穏な幼年期を過した。しかし両親や周囲の人びとは、いつも彼女に戦中の話を聞かせた。彼女はまだ幼くて、実際には戦争を理解していなかった。しかし、繰り返し話を聞くうちに、それがあたかも実体験であるかのように変わり、戦争の記憶として脳

裏に焼きつけられたのである。詩のなかに、実際には体験しなかった「強制収容」などが描かれているのは、このような生い立ちのためであろう。

彼女はとくに移民一世である祖父母から少なからぬ影響を受けた。祖父木下文右衛門は1889年広島に生まれ、ハワイへ来た当初、プランテーション労働者として辛酸を舐めたのち、カイヴィキ (Kaiwiki) に住み、ワイナク製糖会社から土地を借りてサトウキビを栽培していた。農閑期には副業に大工仕事、祖母はラウハラ<sup>6</sup>のマットを編むなど他の日本人移民と同様、仕事を掛け持ちして懸命に働いた。1941年の名簿<sup>7</sup>には大工職と記載されている。ジュリエットの詩のなかにもラウハラを編む女性たち、プランテーションで畑仕事をする男女が登場する。1920年代以降になると、日系人はもはや単純な農作業をする労働者ではなくなり、大工や機械工などの専門職または、借地でのサトウキビ栽培などに従事するようになっていたが、その生活は決して豊かではなかった。

彼女は、祖父母が日本語、英語、ハワイ語を混ぜたピジン語で語る「浦島太郎」を聞いて育った。ふたりは日本の伝統文化をかたくなに守っていたため、ジュリエットもまた、祖父母の健在な間は、その言いつけを守って暮らした。しかし学校ではアメリカ文化の中に身を置くことになり、子供ながらつねに二つの文化の狭間で戸惑いを感じていたようである。それはイースターを祝い、「主の祈り」を唱え、花まつりで、釈迦の誕生を祝って念仏を唱えるという生活であった。

戦争が始まると、祖母は仏像、日本の国旗、祖国で撮影した家族の写真など日本に関する大切なものを庭の隅に埋めて、枯れ葉をかけた。しかし夜になると、声をひそめて「私たちは日本人。これを決して忘れないで」と言った。

祖父は1954年に65歳で他界した。その年、これまでずっと帰化不能外国人として扱われてきた日本人が、帰化法改正でアメリカ市民権が得られることになったが、祖母は市民権を申請せず、ふたりとも日本人のままで亡くなったという。

詩には、プランテーションの労働者、行商人、オゴを採る人<sup>8</sup>、盆踊り、墓参り、箸、刺身など、ヒロとその周辺の日系人の生活がこまごまと描かれている。それらはすべて祖父母との生活体験であった。

The grocery vendor  
from Kawamoto General Store  
blows his horn  
and Grandma, Grandpa, and I  
spill like rice from the house,  
.  
.  
I turn to wave  
at the vendor's truck  
writhing in the dust,  
then to Grandma,  
her old ways,  
good-bye. (GOOD-BYE TO OLD WAYS 『ヒロの雨』 p.41-42)

街から離れたカイヴィキには、ヒロのダウンタウンからカワモト商店がトラックに商品を積んで行商にやってくる。子供たちはそれを楽しみに待っていた。彼女は大喜びで祖父母と走り出る。飴を買ってもらい、祖父の肩車に乗って、帰って行く行商人に手を振りながら、「おばあちゃんの昔風な暮らし方にもおさらばだわ」と思う。

しかしその反面、祖母は彼女の人格形成に大きな影響を与えた。彼女は自らが、祖母に表象される一世女性たちの思いを背負って生きていることを実感するのである。

.  
.



*Issei woman*  
standing sturdy,  
feet apart,  
before an ancient kerosene stove  
adjusting the blue-flamed wick,  
cooking the meals, or  
weaving lauhala mats—  
seated upon a zabuton,  
feet folded back.

·  
·

I balance over words  
on a tight-wire of late light,  
and become a silhouette  
of a bent woman,  
calling your name,  
your shadow, to move into mine.

(GRANDMOTHER 『ヒロの雨』 p.11)

たくましく、しっかりと大地に根をおろして、灯油を使って食事の支度をし、座布団にきちんと正座してラウハラを編む、勤勉で辛抱強い一世女性の姿がいつの間にか彼女の中に宿るのである。その思いを伝えて行くのが、自分に課せられた義務でもあるかのように、一世をテーマとした多くの詩を書いている。

② 『バンブー・リッジ』との出会い

1960年、ハワイが合衆国の第50番目の州になったころ、彼女は両親と

ともに州都ホノルルへ引っ越した。デイヴィッド・リーと結婚して子供を育てた後、ハワイ大学マノア校へ入学し、学部を卒業、さらに大学院修士課程を修了した。若い時に家の経済状況を考慮して一度はあきらめた大学への進学を果たしたのである。この間にハワイ大学を中心とする季刊誌『バンブー・リッジ』(*Bamboo Ridge*)の文学運動に出会い、これに参加することによって、詩を書き、のちには小説を発表するまでになる。ジュリエットは「遅咲きの作家」となった。

『バンブー・リッジ』は、正式には*Bamboo Ridge: Journal of Hawaii Literature and Arts*といい、1978年に中国系アメリカ人のエリック・チョック (Eric Chock) とダレル・ラム (Darrel H.Y. Lum) という2人の若者が創設した季刊の文芸誌である。多くの人が同人に加わり、30年以上経った現在も盛んに続けられており、アン・ルイス・ヤマナカなど文壇で活躍する作家を育て、多くの作品を世に送り出している。

“For me *Bamboo Ridge* gave me an entrée into this world that I really would not have attempted get into.” (*Honolulu Star Bulletin* 2001年2月5日付)

ジュリエットは『バンブー・リッジ』と出あうことで、思いがけず、詩人・作家としての才能を発揮することができた。勉学を終えたのち、息子エリック・リキオ・コウノが、わずか27歳で他界するなどの不幸にあいながらも、リーウワード・コミュニティ・カレッジ (Leeward Community College) で准教授として英作文などを教えながら、創作に励んでいる。

最初の詩集『ヒロの雨』(*Hilo Rains*)は、1988年に出版された。本の扉には夫デイヴィッドの名があり、さらに『バンブー・リッジ』のメンバーと並んで、彼女の両親 ヨシノリ、アツコ・アサヤマおよび義母のエリザベス・リーへの謝辞がある。このことからジュリエットの家族への思い入れの深さが読み取れる。そしてまた、実家の両親のみならず、夫や義母

の励ましがあったからこそ、文学活動に携わることができたのであろう。

つぎの詩集は1995年に出版された『津波のころ』(*Tsunami Years*)である。この詩集についてはつぎの章で詳述する。

彼女は詩だけでなく、エッセイも『バンブー・リッジ』に掲載してきた。すべて自分を取り巻く人びとの生活を描いた身辺雑記である。それらをまとめたエッセイ集『ホノルル公園とペプソデントのほほえみ』(*Ho'olulu Park and the Pepsodent Smile*)を2004年に出版した。この中で、彼女の祖母を思わせる「広島からの写真花嫁」など、かつてのプランテーション生活を克明に再現している。

もっとも新しい作品は、2010年に出版された『暗愁』(*Anshu: Dark Sorrow*)で、最初の本格的な小説である。ハワイ島ハマクア・コーストのプランテーションに生まれたヒミコが、若くして未婚のままに身ごもったことから、日系コミュニティを追われ、戦時下の東京で出産、子を連れて京都、広島を放浪し、東京大空襲、原爆の被害者となる壮大な物語である。本稿では紹介のみにとどめ、これらについては稿をあらためて論じる。

### 3. Juliet Konoの描いた津波

ジュリエットの母アツコは、高校を出るとカリフォルニアで農園を営む叔父の所へ送られ、仕事を手伝っていた。農繁期には果物摘みを、農閑期には白人の家で家事手伝いをして働いた。しかし日系の恋人ができると、父によってハワイへ呼び戻されてしまう。「コトク」(*kotonk*)と呼ばれる本土の日系人との結婚を、父が好まなかったからである。アツコは給料のすべてをハワイの親元へ送り、親の気に入った二世と結婚する「親孝行」な娘であった。

Father had the best of lives—” Just like one Taisho” —we say, behind his back.

Both of my parents came from immigrant, post-feudal Japanese families.

Their families retained and brought with them a subliminal sense of the samurai family structure . The father is the boss; his word, law. The wife obeys the husband . . . .<sup>9</sup>

夫のヨシノリは二世、まじめな人だったが、家の中では「大将」で、家族を支配する明治以来の典型的な日本の家父長そのものであった。ジュリエットはつねに両親には批判的で、支配的な父、従順な母に反発している。しかしその母は1946年の津波にあったことで、その後長い間PTSDに苦しんだ。

詩集『津波のころ』は3部に分かれており、最初が義母エリザベスに捧げる「エリザベスの詩」、つぎが命の恩人ドットおばさんに捧げる「津波のころ」で、最後が夭折した息子と父ヨシノリ・アサヤマに捧げる「画家」となっている。すべて家族をテーマとした詩である。

このころのジュリエットの家族はヒロ管内のワイナク (Wainaku) 製糖プランテーションで働いており、一家の住まいはシンマチにあった。父がT型フォードを所有していたので、ワイナクへ通勤することは可能だった。母もプランテーションで働いていたようである。子供は2人の姉妹のみで、息子はいなかった。

To our sonless dad,  
we were daughters,  
substitute sons.  
We dressed in blue-jeans,  
braded our hair,  
and concealed it  
under baseball caps. (SONLESS、『ヒロの雨』 p.72)

昔堅気の父にとって「家」を継ぐ息子がいないことは残念なことであったに違いない。姉妹はジーンズを着て、三つ編みの髪を野球帽で隠し、男の子風に装って父を慰めた。

このような平穏な暮らしの中を津波が襲った。津波についての詩はすでに最初の詩集『ヒロの雨』の中に見られる。

Sun-bleached houses  
of Sin-machi line one end  
of Hilo Bay  
like crooked teeth.

・  
・

Curious, we bite  
into the porch railing  
with our bellies  
and watch the tide recede.

太陽にさらされて白茶けた家々が並ぶシンマチは、弓なりに曲がったヒロ湾に沿っていて、まるで曲がって生えた歯のようであった。ジュリエットは3歳だった。たぶん姉妹とポーチの手すりから体をのり出し、潮が引いて行くのを不思議に思いつつ眺めていたのであろう。

We hear a rumble far off;  
something's coming in.  
And before we know it,  
a tsunami has us walled in.  
The warnings come too late.

We children are hurriedly piggy-backed  
by Aunt Miyoko and Mother.  
Father rushes out  
to start his Model-T.

低い海鳴りが聞こえ、何だろうと思う間もなく、津波が壁のような高さ  
で襲いかかった。津波警報は間に合わなかったのだ。子供たちはミヨコお  
ばさんと母親におんぶされ、父はT型フォードを発進させようと車の方へ  
急いだ。

Namu, AmidaButsu.  
Mother puts her hands together  
in gassho. Water curls  
above us like a tongue  
lashing; it breaks apart the house.  
The kitchen tansu crashes  
with Mother's wedding china.  
We lose sight of Grandmother.  
We head out for the car  
but we never make it.  
We all link hands. Reminded to breathe deeply,  
warned to never let go,  
we all go under.

(TSUNAMI: APRIL FOOL'S DAY, 1946, 『ヒロの雨』 p.26-27)

母は、前出のフサヨ・イトウと同様、熱心な仏教徒だったのであろう。  
ハワイ日系人にとって念仏は身近なものであった。母は念仏を唱え、合掌  
して仏に祈ったのである。津波は家を引き裂き、台所の食器棚が倒れて、

母の嫁入り道具の陶器が飛び散った。父の車へ向かおうとしたが遅かった。4人はしっかりと手をつなぎ、深く息を吸い込んで、絶対に手を放してはダメと言う。水は舌のように巻きあがりながら、すべてを飲みこんでいく。あきらめて死ぬのは容易だったが、4人は瓦礫と遺体の中に浮かびあがり、何とか命をつなぐことができた。わずか3歳のジュリエットが助かったことは、奇跡としか言いようがない。「命の恩人ドットおばちゃんへ」という『津波のころ』の第2部の献辞から分かるように、誰かに助けられたのであろう。ドットおばちゃんが誰かは分からない。

ジュリエットの家は流され、父の自動車も波にたたきつけられて瓦礫となってしまった。母は泥の中から陶器の破片、かぎ針で編んだドイリー、テーブルクロス、刺繍のついた枕カバーなどを回収する。

Clothing and underwear hang  
like rags, flags of distress  
on the collapsed house,  
disaster knowing no modesty.

Mother cries over her oil-stained  
wedding kimonos, photographs,  
the rich silk obis—  
sashes trying her  
to her sentiments.

衣服や下着がぼろきれのように、まるで「嘆きの旗」のように倒壊した家にぶら下がっている。容赦ない災害だった。これらの描写は、東日本大震災の被災地の光景を彷彿とさせるものである。母は、油で汚れた婚礼衣装や豪華な帯、写真を前にして涙を流す。そして何日もかけてそれらを熱い湯に浸し、洗濯板を使って、石鹸で洗うのだった。

She scrubs and cries.  
Once in a while,  
she gasps  
as she chokes down a sea  
that keeps rising in her.

(AFTERMATH: APRIL 1, 1946, 『ヒロの雨』 p.68-69)

母は大切な着物をごしごし洗いながら泣く。彼女の中で高まる海を抑えるかのように、息を止めて洗い続けるのである。ジュリエットは幼かったが、母の行動から婚礼衣装や嫁入り道具にかける母の想いを知り、それをこの詩を書くときまで、しっかりと心の中に持ち続けていたのである。幼いながらも母の苦しみを理解していたのであろう。

津波のあと、母がなぜこれらの持ち物にこだわるのかを理解するため、津波だけでなく、母の結婚、婚礼の日などに言及している。母の原点に立ち返り、母のこだわりの理由を探し求めているのである。

It's been three years since the disaster,  
and I'm still trying  
I get up in the mornings  
and feel as if I'd swum  
great distances between the stars and waves,  
the night making no delineation.

(Atsuko Between Stars and Waves, 『津波のころ』, p.91)

津波のあと3年たっても、母のPTSDは消えなかった。以下の詩に表わされているように、朝になると星と海の間果てしない距離を泳ぎ続けて行くような錯覚におちいった。



Sleep is the fear my body falls into.  
Sleep is my head being pushed  
down into water by a dead man's hand.

(Atuko's Dream, 『津波のころ』 p.86)

母にとっては眠りさえも恐怖であった。死者によって頭を押さえられ、水に沈められていく恐怖にとられる。『津波のころ』はこのように母について書かれたものが多く、最初の詩集『ヒロの雨』に祖父母の思い出が多く語られているのと対照をなしている。

『津波のころ』には、この他にラウパホエホエで遭難した子供たちを描いた“School Boy from Up Mauka”、犠牲者の遺体を冷やすために葬儀社に氷を運ぶ人を描いた“Joji and the Iceman”などがある。

## おわりに

日系三世の詩人ジュリエット S. コウノの詩は、移民一世である祖父母と二世の両親から多大な影響を受けている。その詩はあたかもジュリエット自身の体験であるかのように、一世と二世の体験を語り継いでいる。町や店の名が実名で登場し、まるで家族の日記のように綴られた詩である。

とくに本稿で取り上げた津波に関する詩は、そのときに3歳児の体験であったにもかかわらず、臨場感をもっている。それは家族から繰り返し、繰り返し聞かされてきた津波の現実が、彼女の脳裏に焼き付けられたからであろう。彼女の詩は家族の詩であり、祖父母が「日本人」にこだわる古めかしさや、アメリカ人でありながら封建的な日本の夫婦そのものである両親に反発しながらも、彼らへ暖かいまなざしをそそいでいる。詩からは華やかな観光地ハワイのイメージからは程遠い、日系移民の生活の中でのきごとや思いが伝わるのである。それは一般のアメリカ人とは異なるハワ

イ・ローカルの人びとの生活である。

2度の津波で地図から消えたワイアケアの椰子島、シンマチの2つの日系人町は、壊滅的被害を受けながらも、津波の届かない高台に移転して復興をとげた。椰子島には、東本願寺、郵便局、ワイアケア小・中学校、日本語学校などもあったという。現在は、2つの高層ホテルがあるが、他は公園やゴルフ・コースになっている。ホテルの1階には波が通り抜ける広いピロティがあり、建物に津波の力が集中しないように工夫されている。シンマチは広大なワイロア州立公園となり、中央に町の名をしのぶ記念碑が建てられている。

1946年の津波の被害を教訓として、49年にはホノルルに「太平洋津波警報センター」が設立された。現在では、日本など太平洋諸国が協力して正確な情報を提供している。また、ヒロには太平洋津波資料館（Pacific Tsunami Museum）が創立され、写真を含む資料を集めた図書館、ビデオライブラリーのほか、津波被害者のオーラル・ヒストリー収集、津波に対する備えなどの啓蒙イベント、諸外国への災害救援活動などを実施している。

津波を考えると、今回の東日本大震災の大津波と切り離して考えることはできない。日本でもヒロと同様に、被害を被ったすべての住民が高台に移転して、町を再建することが可能なのだろうか。それは日本が英知を結集して考えねばならない問題である。

**謝辞** 情報収集にご協力くださいました方がたに御礼申し上げます。

宮崎恵伊様、トモエ・ニシ様、(故) スミエ・ウシジマ様、  
(故) フサヨ・イトウ様

注

1. 津波は、1946年、50年、60年、75年、98年、2004年。46年、60年が大災害。
2. 生涯をヒロで過ごした。1919年生まれ、2011年に92歳で没。インタビュー

- ューは2005年3月5日、ウシジマ家にて。
3. ハワイの地元の人が使うピジンで、kagoは日本語の「籠」、hapaiは「運ぶ」を意味するハワイ語。商品を籠に入れて担いで売り歩く行商人をいう。
  4. 心的外傷後ストレス障害、フサヨやジュリエットの母の場合は、災害経験の1部のフラッシュバックだと考えられる。
  5. 2004年3月5日、ヒロ大神宮でのインタビュー、このとき96歳。
  6. lauはハワイ語で葉の意味、halaは同じくハワイ語で、アダグン（タコノキ）。乾燥させた葉を編んで、マット、帽子、箱などの生活用品のほか、アクセサリーなどを作る。
  7. ヒロ・タイムス社編『ハワイ島日本人移民史』、p.442
  8. ハワイで常食にされる海藻
  9. Small Rebellions, *Bamboo Ridge*, no.44, fall, 1989, p.93

#### 引用・参考文献

Kono, Juliet: *Hilo Rains*, Bamboo Ridge Press, Honolulu,1988.

*Tsunami Years*,Bamboo Ridge Press, Honolulu,1995.

*Ho'olulu Park and the Pepsodent Smile*,2Bamboo Ridge Press, Honolulu 2004.

*Anshu: Dark Sorrow*,Bamboo Ridge Press, Honolulu,2011.

Chock, Eric & Lum Darrel ed. *Bamboo Ridge: Journal of Hawaii Literature and Arts*,Honolulu, 1986,1989,1993,1994,2004.

ヒロ・タイムス社編 『ハワイ島日本人移民史』 ヒロ・タイムス社、ヒロ、1971年。

Kurisu, Scotch Yasushi: *Sugar Town*, Watermark Publishing, Honolulu, 1995.

Okimoto, Ken: *The Hamakua Coast*,Watermark Publishing, Honolulu, 2002.

*Honolulu Star Bulletin* (日刊英字紙) 2001年2月5日付